

### ユネスコ会員綱領

心の中に平和の守りを固めよう  
 すべての人間の尊厳を重んじよう  
 教育・科学・文化の発展に努めよう  
 民族間の疑惑と不信を除こう  
 世界を友愛と信頼のきずなで結ぼう

# 北京・アジア・地球そしてユネスコ50周年



会長 松原 博臣

湾岸戦争に始まり、ソ連邦解の年であった一九九一年は、激動の年であった。年明けて、独立国家共同体の動向、南北朝鮮の統合問題、カンボジアの平和建設、米大統領選挙の年と、激動は更に続きそうな気配である。

「イ・コンサート」が展開された。地球化時代に向けて、地球規模の課題に取組む民間ユネスコ運動は、五十周年をめざして、すべての市にユネスコ協会の設立を期し、ユネスコ活動の輪を拡大・発展させて組織の活性化を図ろうとしている。

ニューヨーク、ロス・アンジェルスを中心とした高校生海外研修という初めての試みは、参加者と関係各位との努力で滞りなく実施することが出来た。若い世代への国際理解を深めるために行われたこのような行動がやがて実を結んで、ユネスコ活動の本命ともいべき国境を越えた人間理解に到達することを願ってやまない。

今年には日中ユネスコ姉妹協会締結をして四年目に当り、協議書の有効期間は一九九二年十二月迄となっている。昨年までの実績は両協会の交流を充分に果たし、友好関係の成果を挙げ得たと思う。本年度は当協会から訪中団を結成し、更に交流の実をあげ、双方の密接な友好関係を促進したい。と同時に理事会の協議を経て友好姉妹提携の継続を図りたい。

めまぐるしく推移する冷戦後の世界情勢のなかで、これまでの活動を直視し、二十一世紀に向かう新しい時代に対応したユネスコ活動のありかたを模索し、あわせて国際社会に貢献出来る人材の育成と、地球を救う活動を実践していこう、との意図で、第四十七回全国大会は、去る九月二十八日、九日の両日、東京の新都庁舎で開催され、オープン・フォーラムは「地球市民としていま、何が出来るか？」というテーマで行われ、引き続き「地球を救うアクティビテ

立大学・広島校学長からお聞きしたり、真珠湾攻撃五十周年を迎えた年末のサロンでは「パールハーバーからヒロシマまで」と題して、原爆被爆者でなくては語れない貴重な体験談を披露してもらった外、音楽・映画・絵画・ヨーロッパの菓子の歴史にまで及び、多彩な催しが注目された。

高橋常任理事の昨年当初よりのご尽力で、「高齢化社会と人間の生き方」と題して、高名な評論家、ノンフィクション作家の柳田邦男氏をお招きして、十月二十五日、広島市西区民文化センターホールで、五百名に近いご参加の方々に多大の感銘を与えた。「新しい自己イメージを作る」心と身体の調和、

北京大会につづき、一国の首都以外で初めて開かれるアジア大会に、広島市は街をあげて準備に大重であるが、将来に向けて皆の友情と意識の高揚のための仕事をすることは、過去を持っているヒロシマだけに意味の深いことと思う。地元のパワーを集中したいものである。

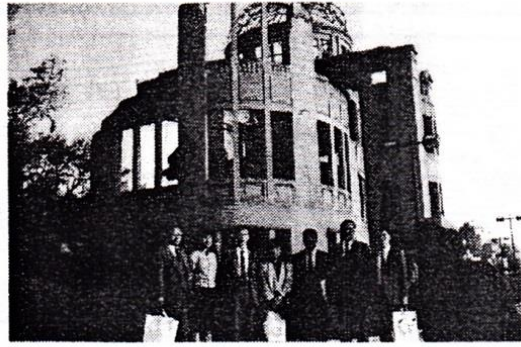
事業内容も、定着してきたユネスコ国際交流サロンは、当初の予定をオーバーして既に八回も開催され、米国人の見た日本・日本人観をニューヨーク市立大学・広島校学長からお聞きしたり、真珠湾攻撃五十周年を迎えた年末のサロンでは「パールハーバーからヒロシマまで」と題して、原爆被爆者でなくては語れない貴重な体験談を披露してもらった外、音楽・映画・絵画・ヨーロッパの菓子の歴史にまで及び、多彩な催しが注目された。

高橋常任理事の昨年当初よりのご尽力で、「高齢化社会と人間の生き方」と題して、高名な評論家、ノンフィクション作家の柳田邦男氏をお招きして、十月二十五日、広島市西区民文化センターホールで、五百名に近いご参加の方々に多大の感銘を与えた。「新しい自己イメージを作る」心と身体の調和、

北京大会につづき、一国の首都以外で初めて開かれるアジア大会に、広島市は街をあげて準備に大重であるが、将来に向けて皆の友情と意識の高揚のための仕事をすることは、過去を持っているヒロシマだけに意味の深いことと思う。地元のパワーを集中したいものである。

北京大会につづき、一国の首都以外で初めて開かれるアジア大会に、広島市は街をあげて準備に大重であるが、将来に向けて皆の友情と意識の高揚のための仕事をすることは、過去を持っているヒロシマだけに意味の深いことと思う。地元のパワーを集中したいものである。

# 熱心視察・熱情接待 北京訪日団、広島で交歓



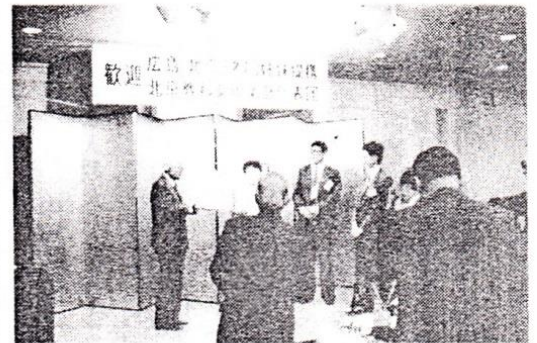
長、同市教育局外事処副処長の謝平氏、ほかに少年宮副主任、小学校長、国家教育委員会行政司処長、教育国際交流協会スタッフの皆さん。

一行は、十月二十日午後、新幹線で広島到着。当協会から松原会長をはじめ幹部役員が出迎えて歓迎の挨拶

宿泊先の広島ターミナル・ホテルで旅装を解く間もなく、午後の見学へ。広島市立中央図書館、映像文化ライブラリー、子ども文化科学館などの社会教育施設を訪問。中央図書館では当協会役員でもある山崎克洋館長が詳細にガイダンスを。一行は図書のコピーライター登録実演に興味を示す。

翌二十一日、午前は、広島大学附属小・中・高校を訪問。ここでも当協会役員でもある伊東亮三附属小学校長（広島大教授）らから概況説明を受けたあと、一行は授業参観へ。

正午前、広島市教育委員会表敬訪問。鍋岡聖剛教育長らと意見交換のち昼食をとりながら交歓。広島市教委側は他に難波



社会教育部長、木原社会教育課長、小西教育センター所長らが出席。

午後は平和公園慰霊碑に献花のあと川本館長の案内で平和記念資料館見学。

次いで牛田公民館で、当協会役員でもある上橋館長から日本独特の公民館の機能と活動状況の説明を聞く。そして隣接のアジア大会水泳競技用の屋内プールを見学。

同日夕、一行の宿舎ホテルの歓迎レセプションには中国人留学生七名を含む約六十名が参加して開催。広島、北京両協会の代表挨拶のあと懇談に入り、各テーブルとも交歓の輪が広がる。宴たけなわの途中、広島市議会を代表して山本誠副議長が歓迎のスピーチを、つづいて広

## 北京ユネスコから 教科書プレゼント

広島市教育センター小西所長が教科書交換の提案を。そして歌の交歓。当協会加藤副会長以下八名のメンバークが北京アジア大会歌の一つ「用心温暖這個世界」を心して世界を温かくしよう」を中国語で披露

北京ユネスコクラブ協会訪日代表団が広島を訪問された時、同代表団を迎えたレセプション会場で広島市教育センター小西清彦所長から訪日団に対して、小・中学校の教科書交換の提案がありました。これを受けて

北京ユネスコ協会から昨年末、広島市教育センターに教科書が送られてきました。教科書は、小学校の歴史教科書2冊、中学校歴史3冊、高校歴史3冊、計8冊で、プレゼン

トの労をとられた北京市教育局外事処副処長の謝平氏（訪日団副団長、北京ユネスコ協会事務局長）は、教科書送付を告げる書簡で「広島市は平和を愛する名高い街であり、忘れがたい印象を受けました。皆様の温かい接待に心からお礼を申しあげると述べ、さらに「広島市の

露 このあとも日中の歌は続きました。二十一日、午前のマツダ工場見学を終えれば、広島の日程は終了。午後発の新幹線での見送り、今秋の訪中時の再会を約束する場でもありました。

小・中・高校の各料の教科書を入手できれば一の申し入れをされていきました。

これに促されて、広島市教育センターでは、早速、注目の教科書を段ボール2箱に入れて北京宛てに送られました。



広島市教育センターに送られてきた中国の小・中・高校の歴史教科書



### 過ちを犯した日本

今年が太平洋戦争開戦五十周年であるが、もっと遡って言えば、満州事変が始まって六十周年に当たる。昭和六年（一九三一年）九月十八日に柳条溝事件が起り、満州事変が始まった。昭和十二年（一九三七年）七月七日に盧溝橋事件が起り、日中戦争（当時は支那事変と呼んでいた）が始まった。そして、昭和十六年（一九四一年）十二月八日、ハワイの真珠湾攻撃によって太平洋戦争の火ぶたが切られた。最近、歴史学者の間では、アジア地域に戦争が拡大して行ったということ、アジ

ア・太平洋戦争と呼ぶのが妥当ではないかという意見が多い。日本は十五年間にわたって連合国と戦争をしてきた。「十五年戦争」とも呼ばれている。満州事変にしても、日中戦争にしても、また、アジア・太平洋戦争にしても、残念ながら、いずれも日本が仕掛けた戦争であり、日本は過ちを犯したというのが、今日、大勢を占めている。

日本にも言い分があったことは確かである。一つは、東南アジアは、タイを除き米・仏・蘭の植民地であった。その植民地を日本が解放して大東亜共栄圏をつくるということである。もう一つは、米・英・蘭が日本に対して行った経済封鎖を突破するために戦争を起したということである。しかし、他国へ侵略して行ったことは事実であり、日本は当然、過去への反省と謝罪をしなければならぬ。

### 「新高山登れ、二二〇八」

そうした戦争は果たして避けられなかったのか。近代日本の海外に対する膨張政策の到達点で、米英などに対する戦争であった。さらには、よりによって最強の開戦論者であった東条英機という軍人を総理大臣に据えたことが、戦争指導部の無謀な人選であった。人選までにい

れが大きな誤りであった。

また、私も初めて知ったのだが、「昭和十六年夏の敗戦」（猪瀬直樹著）によると、当時、総力戦研究所というものがあつた。そこには、平均年齢三十三歳という若きエリートたちが、官界や財界などから集められた。彼らは、いろんなデータを分析して、「もし日米戦わば、日本は必敗する」という報告を昭和十六年八月下旬に近衛内閣に提出している。東条陸相も当然承知していたが、日本必敗論を無視して開戦へと進んだ。

昭和十六年十一月二十六日、いわゆる「ハル・ノート」が日本に提示された。ハルは当時のアメリカの國務長官である。この「ハル・ノート」は、日本軍は中国や仏印から完全に撤兵すること、重慶の国民政府以外のこと、重慶の国民政府以外のこと、重慶の国民政府以外のこと、重慶の国民政府以外のこと、要するに満州事変以前の状態に戻すということが内容の主体であった。時の東条首相はこれをのめば、まず陸軍がたがたになる、絶対にのめない主張し、十二月一日に開戦を決定した。東条首相をはじめとする軍部は、国民と国家を道連れにして無謀な戦争に突入した。

十二月二日、全艦隊に対し、「新高山登れ、二二〇八」つまり、

「十二月八日、真珠湾攻撃」が打電された。台湾の新高山が日本帝国の最高峰であり、富士山より高かった。それを暗号に使った。しかし、日本の暗号はアメリカに解読されていた。アメリカは日本が開戦にふみ切ることを知っていた。情報の差というか、暗号技術の差というか、日米の差は明らかであった。

アメリカも開戦を決意していたが戦争準備がやはり間に合わないということ、できるだけ外交交渉を引きのばす策に出た。さらに、日本に最初の一撃を打たせ、大義名分を手に入れたという戦術をとった。真珠湾の奇襲攻撃によって最初に手を出したのは日本ということになったのだから、この攻撃に対してアメリカは敢然と立ち向かうということになった。考えて見れば、アメリカの外交交渉もまことにずるい方法であるといわなければならない。

### 不意打ちとなった真珠湾攻撃

アメリカは日本がまさか真珠湾を奇襲攻撃するとは思わなかったようだ。日本は最初にアジアに繰り出してくるのではないかと考えていたようである。

十二月七日、現地は日曜日、のんびりとその朝を迎えた。日本の攻撃の前に幾つかの兆候があつた。真珠湾のすぐ外に正体

不明の潜水艦が発見された。これは、日本の特殊潜行艇であったが、アメリカ駆逐艦によって撃沈された。しかし、これは、全軍に警戒配置をするような緊張感はなかった。また、オアフ島の陸軍リーダーは北の方からハワイに向かう飛行機群をとらえた。十二月七日には、アメリカ本土からB29爆撃機が真珠湾に飛来する予定であったので、その機影と判断した。まさか日本がやってくると思っても見なかった。

一九四一年十二月七日、日本時間十二月八日未明、南雲中将率いる、空母、戦艦、巡洋艦などの機動部隊が刻々とハワイに近づきつつあつた。空母からまず百八十九機の第一次攻撃隊が発進した。しばらくして、第二次攻撃隊百七十一機が飛び立った。攻撃隊が最初に奇襲をかけたのは、真珠湾を防衛する飛行場であった。飛行場に配備してある戦闘機や爆撃機を、飛び立つ前に徹底的にたたき落とすのが目的であった。続いて、八隻の戦艦をはじめとする米太平洋艦隊に攻撃をかけた。そこには、空母の姿はなかった。

十二月七日午前七時四十九分に、「全軍突撃せよ！」という指令が全機に発せられた。その時、対空砲火はなかった。アメ

リカの戦闘機も飛んでいなかった。午前七時五十三分、有名な「トラ、トラ、トラ」われ奇襲に成功せり」が打電された。アメリカ軍は全くの不意打ちをくらったわけで、日本は宣戦布告をする前に奇襲をかけたことになってしまった。

この日本の奇襲攻撃は失敗であったという説がある。当時の作戦部長キング提督が述べている。真珠湾には空母はいなかった。その空母は戦争の後半において雄雄を決する場合にいかにも大きな役割を果たしたか。そして、戦争に必要な石油基地も破壊されなかった。キング作戦部長は、暗に日本の奇襲攻撃は失敗であったと言いたかったにちがいない。

この奇襲攻撃によって、日本は、アメリカ太平洋艦隊の旗艦である戦艦アリゾナ号の撃沈をはじめ、艦船や飛行機に大きな損害を与えた。将兵の戦死者は二千三百三十四人。市民が六十八人死亡、ほかに日系人が二人死亡したという説もある。市民は標的ではなく、あくまでも巻き添えであった。

正式に宣戦布告がないと戦争には入れないとする「ハーグ条約」がある。一九一一年十二月十三日に日本も批准している。この条約には、理由を付した開

戦宣言、または、条件付き開戦宣言を含む最後通牒という形式の明瞭な事前の通告なしに、相互間に戦闘を開始してはならないという規定がある。日本は結果として「ハーグ条約」に違反したことになる。

では、なぜ不意打ちになったのか。暗号解読に手間取った。つまり、日本本国からワシントン大使館にきた十四通りの暗号を十二月六日のうちにすべて解読することができなかったため、ハル國務長官と野村・来栖両大使との会見の約束時間間に合わなかったということである。この間の状況は、「マリコ」(柳田邦男著)にくわしく述べられている。

アリゾナ記念館での出会い  
現在、真珠湾の真ん中あたりにアリゾナ記念館がある。記念館の真下の海中には、戦艦アリゾナ号の残骸がある。骨もまだあるそうだ。時折、油が円を描いてぽっかりと浮いてくる。これは戦死した乗組員の涙だという人もいる。

私は、一九七八年六月、第一回国連軍縮特別総会出席への帰途、この記念館を訪問した。私を含めて五人の被爆者が花束を買って行った。港に到着したが、数百人の人が並んでいた。私も船に乗る順番を二時間余待

った。日本人は私たちともう一つのグループだけだった。ワイキキの海岸には日本から来た若者たちが沢山いた。この中の何人がアリゾナ記念館へ行くだろうかと思いつきながら順番がくるのを辛抱強く待っていた。

その間、まわりのアメリカ人に私たちの英文の被爆体験集などの資料を手渡そうとした。すると、ある人は受け取らない、ある人は厳しいまなざしで読んでいる。「アメリカ人はやはり日本人を許してはいないのだろ

うか」と、周囲の厳しい様子を感じとり、資料の配布は中止した。アメリカ人の子供たちが、私たちが折った折鶴をニコニコしながら受けとってくれたのが、せめてもの慰めであった。そのうちに順番がきて、およそ四十人のアメリカ人と一緒に

船に乗った。真珠湾を一周する際に、日本の奇襲攻撃の説明を乗組員がしていた。記念館の一番奥の方の壁面にアリゾナ号の将兵千百数十人の戦死者の氏名が刻まれていた。私たちは壁面の前に進み、花束を捧げて戦死者の冥福を祈った。後ろの方からアメリカ人が私たちの仕事を眺めていた。

「日本の奇襲攻撃で若い乗組員がどんな思いで死んで行ったか、そのことと自分の被爆体験が交錯して、思わず泣いてしまった」という。

被爆女性の泣く姿を見て、アメリカの老夫婦がチリ紙を差し出した。「涙をおふきなさい」ということだ。その老夫婦も涙を浮かべながら私たちに話しかけてきた。通訳もいない。言葉は分からない。私たちは困ってしまつた。しかし、私は老夫婦の語りかけを一生懸命に聞いた。わかる単語が時折聞こえた。「Die—死」、「Family—家族」、「Brother—兄弟」、「War—戦争」などの単語であった。私は推測した。「この老夫婦の家族の中には、戦争で死んだり、負傷したりした兄弟たちがいるんだなあ」と。

そこで、私は、四人の被爆者に提案した。「No more Pearl Harbor」、「No more Hiroshima Nagasaki」、「No more War」、「Peace」—、「」の四つの英語で語りかけながら、もう一度被爆体験集などをみんなに渡してみよう」と、私たち五人は手分けをして四十人のアメリカ人の中に入ってしまった。するとどう

だろう。港で順番を待っていた時の厳しさはなかった。微笑みながら、握手を求めながら、あ

るいは、肩をたたきながら、口々に「Peace, Peace」と言いながら、資料を受けとってくれた。そこには言葉はいらなかった。たとえ、言葉の障害はあつても、肌の色がちがっても、はたまた国境はあつても、私たちが態度で示せば相手は必ずわかってくる、理解し合える。同じ人間同士ではないか。私たちが祈る姿を見て、被爆女性の涙に接して、アメリカ人たちは態度を変えたのだつた。感動的な出会いであった。

日本は真珠湾攻撃によって戦争に突入したように一般には受けとられているが、それより一時間二十分前にマレー半島に上陸している。したがって、マレー半島で開戦の火ぶたが切られたということになる。そして、日本はほとんど戦線を拡大して行った珊瑚海海戦を契機に敗戦に陥って行った。珊瑚海海戦は五分五分、ミッドウェー海戦は大敗。マッカーサーも奪回に意欲

を燃やしてフィリピンに帰ってきた。インパール作戦には失敗した。サイパン島や硫黄島の王冠、沖縄でも敗れた。いよいよ日本本土への空襲が始まった。サイパン島や硫黄島にB29の基地を作って本土へ猛爆をかけて行った。そして、広島・長崎への原爆投下。ソ連が参戦して、

一九四五年八月十五日、日本は連合国に無条件降伏した。

④マンハッタン計画で原爆製造

原爆は、グローブス准将が最高指揮官となった、「マンハッタン計画」の中で設計・製造された。原爆の実際の設計と製造の責任者がカリフォルニア大学のオッペンハイマー教授であった。アインシュタイン博士が、ドイツに原爆をつくらせてはならないと、危機感を抱き、ルーズベルト大統領に手紙を出して、アメリカが原爆の開発・製造を行うよう進言した。その意味では科学者は大きな過ちを犯したということになる。

グローブス准将は、すでに放射能の危険性を知っていた。アイゼンハワー將軍率いる欧州の連合軍がノルマンジー上陸作戦を敢行する際、ドイツ軍が何んらかの放射能によって抵抗するのではないかと危険を感じていた。グローブス准将はアイゼンハワー將軍に手紙を出し、疲労、吐き気、白血球数の減少、紫斑などの症状が出たら直ちに本国へ連絡するよう伝えた。したがって、アメリカはすでに原爆投下による放射能被害は熟知していたのである。

大統領の時には、原爆製造計画は知らなかった。欧州のアイゼンハワー最高司令官も太平洋のマッカーサー最高司令官も、原爆投下の一週間前まで知らなかった。原爆製造計画は、ルーズベルト大統領、スチムソン陸軍長官、マーシャル陸軍参謀総長、それにグローブス准将の四人だけが知っていたのである。

トルーマンが大統領になり、原爆問題暫定委員会を作り、一九四五年六月一日、次のような結論を出した。原爆は速やかに日本に対して使用すること、それは、他の建物に取り囲まれた軍事目標に使用する事前通知なしに使用すること——であった。原爆投下の目標は、軍事目標だけではなかった。他の建物つまり、一般市民の建物も最初から標的にしたわけである。そこが真珠湾攻撃とは質的に異なる。真珠湾攻撃は確かに不意討ちではあったが、一般市民を標的にしてはいない。真珠湾攻撃は、あくまでも、太平洋艦隊と軍事施設への奇襲であった。戦争では、兵隊を殺傷する、兵器を打ち砕く、軍事施設を破壊することは常識である。しかし、一般市民や捕虜はその対象としてはならないのである。アメリカの原爆投下は、最初から一般市民を標的にした、国際法違反

の残虐行為であった。

④ルメイ將軍の焼き尽くし作戦

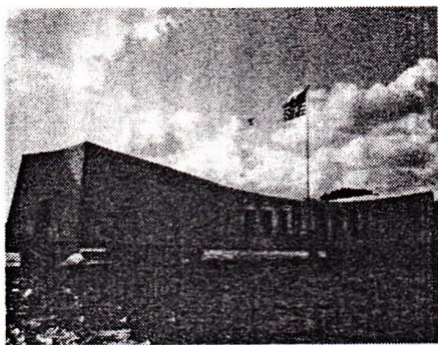
原爆投下の指揮をとったのがルメイ將軍であった。ルメイ將軍の戦略は、焼き殺す、殺き尽くすという残虐性をおびていた。東京大空襲をはじめとする日本本土の空襲にそれが戦略として採用された。その主なものが六都市、六業を焼き尽くすという戦略であった。六都市は東京、川崎、横浜、名古屋、大阪、神戸、六業は製鋼、航空機、船舶、港湾、ベアリング、電気工学であった。

東京、大阪、名古屋などの大空襲は無差別爆撃であった。軍事施設や工場、一般市民の別なく無差別に焼き殺し、焼き尽くしていくという残虐性に富んだ攻撃であった。原爆投下とともに六都市、六業に対する無差別爆撃は国際法違反の行為であった。日本のアジア諸国における残虐行為は国際的に避難の的となったが、同様にアメリカの無差別攻撃も糾弾されて当然の行為であった。このルメイ將軍に日本政府は勲章を与えている。あきれたものが言えない。

④原爆投下用に保存された四都  
グローブス准将とオッペンハイマー教授が相談してつぎのような結論を出した。それは、原爆投下によって日本国民の戦意

を打ち砕くような場所の選定に当たって、重要な司令部、軍隊駐屯地、軍需品の生産地、軍事的性格を多分に持っている場所、原爆の効果を測るために空襲をまだ受けておらず、威力がはつきりと表れるような地形の場所を選定して、そこに投下するということであった。

その基準によって選定されたのが、京都、広島、小倉、新潟の四都市であった。このうち京都は除外された。京都は古都で、日本人の心の故郷であり、特別な存在であるという日本人の感情を、京都を知っていたスチムソン陸軍長官が戦略的に、政治的にうまく利用して除外した。京都をはずすことで戦後、日本人をアメリカ側につかせる狙い



真珠湾にあるアリゾナ記念館。

題字ベースの写真は同館壁面に刻まれたアリゾナ号戦死者氏名

があった。京都の代わりに長崎が加えられた。そして、この四都市に対する爆撃を禁止したのである。四都市は原爆投下用に温存されたのである。軍隊もさることながら、日本人を殺傷する、広島市民を殺傷する、この結果日本国民に心理的に大きな打撃を与える。それが軍部に反映し、さらには、天皇にまで反映して降伏の要因になるだろうというのが、アメリカのねらいであった。

最初、原爆は三つ作られた。ウラニウム爆弾、これが広島型。プルトニウム爆弾、これが長崎型。もう一つプルトニウム爆弾を作った。ウラニウム爆弾はあらかじめ実験しなくてもその効果は一〇〇%ははっきりしているという自信があったという。プルトニウム爆弾は、実験してみないとその効果はわからない。そこで、アラモゴドの砂漠で実験した。それは、三十メートルの鉄塔の上で爆発させるという方法をとった。空中で爆発させるより効果は半減するようだが、それでもかなりの効果があった。広島型が十五キロトン、長崎型が二十二キロトン、実験用が十七キロトンであった。

④第一目標広島に決定

実験に成功して、一九四五年

八月二日に米軍の原爆投下作戦命令書が発せられた。「攻撃日」八月六日、攻撃目標・広島市中心部と工業地域。予備第二目標・小倉造兵廠ならびに同市中心部(後略)——これが命令書の内容であった。八月六日の朝早く、テニアン基地を、ポール・チベッツ大佐が機長のエノラ・ゲイ号が原爆を積んで広島に向かつて飛び立った。

「広島反転原爆の証明」(若木重敏著)の中で筆者はつぎのように述べている。「エノラ・ゲイ号は、最初、西の方から広島にきて、一旦海上へ出た。今度は反転して引き返し、前とは反対の方向から広島に侵入し、原爆を投下した。一旦海上へ出た時に空襲警報、警戒警報は解除された。解除された間隙をぬって再び広島へ立ち戻って投下した。これは、あらかじめ用意された、周到な作戦であった」と。確かに、八月六日の朝は、未明に発令された空襲警報や警戒警報は解除され、一般市民は重苦しい雰囲気から解放され、ホッとしていた。原爆はまさに無警告の中で一般市民を標的として投下されたのである。明らかに国際法違反であった。

一九四五年八月六日午前八時十五分、世界最初の原爆は、広島

の島外科病院の上空、五百八

十メートルで炸裂した。広島型原爆は十五キロトン、五トン積みのB29三千機分の通常爆弾に相当する。長崎型は二十二キロトンで四千四百機分に当たる。原爆は通常爆弾とは比較にならないだけの破壊力があつた。私が原爆資料館長を務めていた、一九八一年二月、ローマ法王が資料館をご見学になった。館内をご案内してパノラマの前で、「原爆の破壊力は通常爆弾に比重すればB29三千機分に相当する」と説明した。すると、法王は「通訳が一けた間違えて私に伝えたのではないか」と質問された。つまり三百機分であるのに、通訳が一けた間違えて三千機と伝えたことと解されたのである。私は、「三千機分に当たる」と改めて伝えると、法王は顔を大きく左右にふられ、厳しい表情をされたことを、いまでも鮮明に覚えている。

原爆の被害は熱線、爆風、放射線の三つの複合作用によるものである。爆発時の火球の表面温度は攝氏数百万度、爆心地一帯は三千度から四千度の熱線があつた。鉄が溶けるのが千五百三十度であるから、いかに強烈な熱線であつたかがうかがえる。爆風は半径十六キロメートル、つまり、宮島あたりまで被害が及んでいる。強い風の最大

風速は三百八十メートル、台風で一番風の強かつたのが沖縄宮古島台風で最大風速八十二メートル、今秋の台風十九号は、広島県における台風観測史上最大の五十八・九メートル。しかし、三百八十メートルには遠く及ばない。放射線は四百ラドから七百ラドの強いものであつた。

○一ラドが許容量、胸に一回レントゲンを照射した場合の放射線量と同じである。三十五万人が被爆して、被爆後4か月間に十四万人前後、五年後の一九五〇年までに約二十万人が死亡した。

#### ◆チベッツ元機長と会う

一九八〇年六月、私は、原爆投下機エノラ・ゲイ号の元機長ポール・チベッツ氏に会つた。ワシントンDCの上院議員会館で「広島・長崎原爆展」を開催した時である。チベッツ氏が被爆者と合うのはもとより初めてである。チベッツ氏と旧知との間柄であつた中国放送の岡田記者の仲立ちによるものだが、最初チベッツ氏は私に合うのをためらっていたという。岡田記者の説得もあつて結局は私との会見を承諾した。

チベッツ氏は、上院議員会館の裏手の公園そばで待っていた。私に会うのをためらっていたチベッツ氏に私の方から声を

かけた。「あなたに、今更恨み、つらみを言うつもりはないので安心してほしい」と、ケロイドが残る右手を差し出し握手を求めた。彼は右手のケロイドを見逃す筈はなかつた。「この手は原爆でやけどをしたのか」と問うた。「そうだ」——彼の表情がひきつった。

「当日は空襲警報も警戒警報も解除されていた。私は当時中学二年生、十四歳。私たちは安心して校庭で朝礼が始まるのを待っていた。私は、級友たちと一緒に、校庭から空を仰いであなたの飛行機を眺めていた」

「そう、当日の広島空は快晴だった。地上がよく見えた」——こんなことを二人は交ごも語り合った。

最後に私は、「私たち被爆者は過去の苦しみや悲しみ、憎しみの一切を乗り越えて、今日まで核兵器廃絶と世界平和の実現を一貫して訴えてきた。どんな立場の人びとの上にも、どんな国々の上にも、再び核兵器の過ちが繰り返されてはならない。どうか、あなたも平和のために尽くしてほしい」と訴えた。チベッツ氏は、「あなたの気持ちにはよくわかる。しかし、もし、もう一度戦争が起これば、私に同じ命令が下つたら、私は同じことをやるだろう。それが軍人な

のだ。それが戦争の論理なんだ。軍人は命令のままに動かざるを得ない」と言った。「もちろんそうだろう、その気持ちはよくわかる」と私は答えた。しかし、このままで終わっていたら、私はやり切れない暗い気持ちのままで終わっていたに違いない。チベッツ氏は最後に「だから、戦争は絶対に起こしてはならないのだ」と強く言った。私はホッと、安堵の胸をなでおろした。

およそ三十分の語らいの間、チベッツ氏の両手は私の右手を握つたままだった。チベッツ氏のめがねの奥は何かうるんだような気がした。チベッツ氏はアメリカのマスコミに「私は間違つたことをしたとは思わない。命令のままに動き、あたり前のことをしたまでだ」と言い続けてきた人である。しかし、この時の語らいで、チベッツ氏の心の中に痛みがあつたのではないか、チベッツ氏もやはり「人間」であつたと思つた。チベッツ氏とはいまでも文通を続けている。

いま私は、日本が起こした戦争への反省と平和の尊さをかみしめている。

(広島ユネスコ協会常任理事)  
(編集部注・本稿は昨年十二月の国際交流サロンの講演の抄録である)

# 「ともに生きるために」

## 第14回高校生のごどい開く

広島大附属高教諭 永田 龍男

「好久没見了！（お久しぶりです）」と投げかけたら、すかさず、「御無沙汰しております。お変わりございませんか」と、

よどみない日本語が帰ってきた。多忙な日程を割いて、快く参加してくださった屈迎春さんは、一九八七年度にも講師を引き受けていただき、今回は二度目であった。もう一人の講師、

方青さんも、すぐあとに別の会合を控えたあわただしさにも拘わらず私たちのために駆けつけてくださった。

こうした善意に支えられて、十一月十七日、日曜日に例年どおり「広島ユネスコ高校生のつどい」が広島大学附属高校研修館で開催された。数えて14回目である。参加者数21名。決して

多くはないが、「心に平和の砦」という共通の希いをもつ若者が一堂に会し、国際理解と協力のために自らなしうる道を求めたの研修が14年間、跡絶えることなく継続されていること自体が、意義あることと思える。本年度のテーマは「ともに生きるために——中華人民共和国に学ぶ」。

まず八月二十三日～二十九日の七日間、当協会による初めての海外研修に派遣させていただいた高校生の代表二名による研修報告があった。広大附高一年の稲葉圭一郎君の主題は「米国の



中国人留学生屈迎春さん。達者な日本語に高校生も感嘆

における貧富の差」。広島第一女子商高三年の植中清美さんは「日米の物価比較」について発表した。時程の関係で質疑応答の機会を設けられなかったのが残念だが、兩名とも、見聞した事実をもとに、その因つて来た背景にまで言及されていたように思う。異文化に接したショックからの立ち直りの早さ、わずかな違いも見落とさない鋭い観察眼、そして、したたかな行動力。すべて若者ならではの逞しさを見せつけられた思いがした。

広島大学に学ぶ中国からの留学生の両講師には「識字」をテーマに、主として文字と生活について話していただいた。流暢な日本語に驚いていた、わが高校生たちも、コーヒー・ブレイクのあとの講師を囲む話し合いは活発に質問を浴びせかけていた。それにしても、相当抽象的な内容の問いにも、適確に応じていく屈さんの日本語の使用能力には舌を巻かざるをえない。高校生の一人が呟く。「よしっ！僕も英語、頑張るぞ」。

昼食後、恒例のユネスコ・コーアクション街頭募金のため、そごう百貨店前に立つ。高校生の手づくりになる「識字」

の横断幕を、例年は左右の支柱を手で引いて支えておくのだが、今年は道路脇に金属フェンスが備えられていたので、余程、楽になった。募金に応じてくださった方がたへ手渡す、色とりどりの見事な造花は、第一女子商高のユネスコ部員が多大な時間と労力をかけて早くから準備してくれた労作。二時間で寄せられた二五、四九一円は、それにこめられる多くの人のびとの平和への願いとともに、日本ユネスコ協会連盟を通じて、世界寺子屋運動基金へ送られた。



恒例のコーアクション街頭募金で広島市繁華街に立つ

### 高校生海外研修 報告書を発行

広島ユネスコ協会は、昨年八月、高校生四名（広島大附属高男子二名、広島第一女子商高女子二名）と引率者から成る高校生海外研修団を米国、ニューヨーク（国連本部など）、ロス・アンジエルズに派遣しましたが、その見聞と研究内容をまとめた報告書（B5判、20ページ）が、このほど刊行されました。

同報告書には、高校生それぞれの個人研究テーマ「日米の物価比較」「ニューヨークの街並と風景」「貧富の差と米国」「新聞研究」に基づくレポートと引率の団長、高校生クラブ顧問の報告が掲載されており、とりわけ高校生の新鮮な驚きと感動が伝わってきます。

たとえば「車で4・5分の所に大富豪と貧しい人が住み、その上空を何億円もする戦闘機が飛び交うという社会を目のあたりにして大きな矛盾を感じた。アメリカで輝かしい陽と暗く黒い陰とを見ることができて、いい経験ができた」など。五百部発行し、会員に配布しました。

# 高齢化社会の生き方

## 柳田講師、聴衆魅了

広島ユネスコ協会では、月々の交流サロンのほかに年一回、「大型」の講演会開催を恒例にしています。今年度は、評論家でノンフィクション作家の売れっ子講師、柳田邦男氏を招いて、昨年10月25日、広島市西区民文化センターで開催（共催・広島県、協賛・湧永製薬）しました。

演題は、「高齢化社会と人間の生き方」。高齢化社会の到来を迎えて、文化どおり一人ひとりの生き方が問われている今日、講師の医学的見地、社会的視野からの説得力のある語りかけは、スライドや朗読などの



高齢化社会と人間の生き方

視聴覚に訴える多面的な話の展開と相まって、聴衆に確かな理解と深い感銘を与えました。

講演会は、広島市民生委員・児童委員協議会、新聞社、放送局などの後援協力をいただいたことも作用して、当日の会場には社会教育、医療、民生委員などの活動に携わる人びとをはじめ幅広い層の参加が目立ち、入場者の数でも定員五百名の座席が埋め尽くされるという、質量ともに実り多い催しとなりました。

なお、広島ユネスコ協会では、講演会成功のためにポスターを制作して宣伝につとめるとともに、入場希望者を予め募って入場券を発行するなど、積極的なとりくみを展開しました。

### ユネスコ100冊 広島の二文庫へ

一九七九年の国際児童年を記念して始まった「ユネスコ・ライブラリー100」寄贈事業は、今年度で13年目を迎えました。が、

広島地区の今年度寄贈先に二つの子供文庫が選ばれました。

一つは、安佐南区長束の杉の木会（代表広安佳子さん）、そして西区己斐のビアンカ文庫（代表早田和嘉さん）。

広島ユネスコ協会では、3月4日にビアンカ文庫に、同日杉の木会に対し、贈呈式を開いて百冊の児童図書の日録を贈りました。

### 国際交流サロン・下半期

10月27日「中国近代絵画の源流」中国北京中央美术学院・李行簡教授

12月21日「パールハーバーからヒロシマまで」広島市平和文化センター事業部長・高橋昭博氏



（12月のサロン。高橋昭博氏）

### 報 告

氏（当協会常任理事）

1月23日「最近の国際情勢とわが国の対応」外務省条約局審議官・野村一成氏

広島市にある国際交流団体のうち30団体が、広島市国際交流協会の呼びかけで、昨年12月13日、広島国際会議場に集まり、情報、意見を交換しました。当協会から信井事務局長が出席しました。

#### ▼ぺあせるべり

広島に住む外国人と市民が音楽やスポーツを通して交流するイベントが、昨年の10月27日、広島市中央公園で開かれ、広島ユネスコ協会も参加しました。

▼国際交流団体連絡会

今春、広島での留学を終わって帰国する留学生の歓送会を兼ねた広島市在住留学生交歓会が、1月30日、広島国際会議場で開かれ、当協会から代表が出席して、親睦を図りました。

#### ▼留学生交歓会

### 謹しんで 哀悼の意を表します

■岡田泰二氏（顧問。元会長）  
昨年11月1日、肺癌のため逝去。77歳。

昭和56年から2年間、当協会の会長として尽力され、とりわけ第一回民間ユネスコ運動世界大会・広島大会の準備などその成功に寄与された。また、永年病院長として地域医療、広島県・市医師会理事として医政にも尽くされる。

■内海千代子氏（故内海蔵顧問夫人）、1月6日、脳こうそくのため。79歳。

■榎本克彦氏（会員）。1月25日、心不全のため。46歳広島市植物公園主任技師。

■俣野仁一氏（元理事）。2月12日。81歳。病院長。

### 会員消息

#### 出版記念会

▽吉岡尊治監事Ⅱ句集「夕東風」（溪水社）刊。喜寿、叙勲（昭和63年）祝賀を兼ねて昨年11月3日に会を開かれる。

▽平岡豊恵理事Ⅱ自叙伝「わたしの半生・こころを育てて」（都市文化社）刊。2月11日に会を。